

三先生のご退職に際して

国際関係学部長 野澤勝美

国際関係学部は、平成22年4月1日に学部開設から20周年記念日を迎えるが、その目前の3月31日をもって、川口博久先生、鯉淵信一先生、間苧谷榮先生の三先生が同時にご退職されることになった。間近に迫ったこの時期を思うと、三先生が存在と学部のみならず大学への貢献の大きさにはあらためて深い感銘を受けるものがあります。本学の国際関係学部は地域研究を基盤としているところに他大学に例を見ない独自性があり、あえて言えば「非西洋社会における国際関係学」が念頭におかれたのではないかと個人的には理解してきた。その意味においても、三先生には地域研究を基礎に学部教育課程の活性化にご尽力いただいてきたと解している。

川口先生は、青山学院大学大学院で学ばれ、途中オハイオ州立マイアミ大学に留学された。昭和48年4月に本学教養部専任教員に就任され、以来37年間奉職されておられる。平成2年の国際関係学部開設と同時に学部に移られたが、学部のみならず全学的な要職に就かれている。英語教育センター長をはじめに、国際交流委員長、留学生別科長を各7年間、副学長を3年間務めておられる。AUAPをはじめとする全学的英語教育の強化、充実に向けた熱い思いがあったことと拝察する。かかる献身的なご努力は、近年、本学の国際化教育が全国規模で常に高い評価をうけている点に如実に反映している。研究面では、北アメリカ研究を専門とされ、日系アメリカ人を対象に、明治初期のカリフォルニア移住、第2次大戦期のユタ州における日系人迫害に関して優れた論文を発表され、高い評価を受けている。教育面では、異文化理解に焦点をおいた北アメリカの社会文化をテーマに講義科目、ゼミをご担当いただいてきた。さて、川口先生は伊勢神宮近くのお生まれである。三重県人は本居宣長（国学）をはじめに女性的な学者が多いとされてきた。東

畑精一（農業経済学）、丹羽保次郎（電気工学）がそれである。川口先生からは、身だしなみのよさ、感情を表に出すことのない端正なお話ぶりを通して、学部教員一同多くを学ばせていただいた。

鯉淵先生は、本学経済学部を卒業後、在モンゴル日本大使館勤務を経て、昭和51年4月に本学アジア研究所専任研究員に就任された。以来、34年間奉職され、この間、平成4年に国際関係学部に移られた。さらに平成12年からは学長職を1期3年間務められ「アジア夢カレッジ」の設置を実現された。また、入試の新方式として「アジア推薦入試」の導入がはかられている。若き学徒のアジアへの思いを育むプログラムを次々と提案し、実現される熱意の背景には、鯉淵先生の内陸アジア大陸の土地、文化、民衆に対する思いが伺われる。2年半の日本大使館勤務を含め、その後もモンゴルの政治、経済の現状分析にあたられ、日本におけるモンゴル地域研究者としての名声を博しておられる。モンゴルの地は先生にとって知己を増やす格好の舞台であり、ご親交のあった、司馬遼太郎、開高健、椎名誠など作家の人となりのお話を聞く機会もあった。しかしながら、鯉淵先生は一方では、苦境を耐え忍ぶ市井の人に対する思いやりを示されておられる。司馬遼太郎著『草原の記』に登場する中国・内蒙古での抑圧から逃れたツェベクマさんの自伝的著作『星の草原に帰らん』（NHK出版、1999年）の翻訳を行っておられる。研究、教育面では、専門のモンゴル地域研究をベースに、「東アジアの社会文化」などを担当されている。ゼミ案内では「アジアは多様であり、この多様性こそがアジアの可能性であり、新世界構築の希望である」と述べておられ、さらに「内陸アジア世界の地平から日本、アジアをあらためて見直す」と続く。すなわち「アジアから学ぶ」との視点で、これにより日本の将来を考えることの必要性は、鯉淵先生の一貫したアジア理解教育の立場であり、言うまでもなく学部教員の共有するところである。

間苧谷先生は、学部、大学院ともに一橋大学で学ばれ、アジア研究の泰斗であられる板垣與一先生（後の本学経済学部長）のもとでインドネシア研究にあたられた。東京外国語大学、国立インドネシア大学などで教鞭をとられ

た後、昭和50年9月に経済学部助教授として就任された。以来、34年間奉職され、この間、昭和51年の経済学部国際関係学科設置、前述のとおり、平成2年の国際関係学部開設があった。間学谷先生は平成5年に国際関係学部に移られ、翌6年から学部長の職務に2期4年間にわたり就かれたが、地域研究者としての深い学殖をもって学部運営に邁進された。このことは、学部カリキュラム体系の設計に反映されており、一つは、ゼミの重要視であり、「オリエンテーション・ゼミ」、「基礎ゼミ」、「専門ゼミ」、「総合ゼミ」という当時は画期的な四年一貫少人数ゼミ教育を配置した。今一つは、地域研究領域の体系化であり、地域言語を基礎とする地域研究のカリキュラムの開発など他大学の国際関係領域の学科、学部にも例を見ない先駆的なカリキュラムが形成された。教育、研究面に関しては、地域研究を中心とする学部国際教育、大学院生研究指導などに熱心に取り組み、ゼミからは気鋭の若手研究者を送り出してきた。また、多くの留学生も指導してこられた。学部、大学院のゼミからは学長賞や理事長賞に多くの受賞者を輩出しておられる。また、初年次導入教育に際しては論文の書き方に関する徹底した指導をご提案いただいた。

一騎当千であられる三先生の同時退職は、言うまでもなく学部にとって大きな痛手ではありますが、今後直面すると考えられる難局に際しては、育ててくださった後継者の力量に期待し、学部教員一丸となって対処いたす覚悟があります。どうぞご安心ください。今後ともご健勝、ご多幸でおられますことを衷心より祈念いたしております。